



甲虫ニュース

No. 147
September 2004

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ツツキノコムシ科検索図説 VI^{注1}

——ツツキノコムシ族⑤ (ダルマツツキノコムシ属, エゾヒメツツキノコムシ属,
トゲヒメツツキノコムシ属, ヒトツツキノコムシ属, ミツツツキノコムシ属,
ツヤヒメツツキノコムシ属)——

川 那 部 真

1-12. ダルマツツキノコムシ属 *Nipponapterocis* MIYATAKE, 1954

触角は10節で先端3節の球桿がかたく接続する, 球桿各節は感覚孔を欠く, 前胸腹板中央部は強く膨らみ縦の隆起線を具える, 後翅を欠くために体型はダルマ型, 上翅点刻は大きくへそ状, などの特徴を具える. 現時点では下記の3種が知られるが, 後翅を欠いて飛べないため, 地域によりかなり分化している可能性がある.

種への検索

1. 上翅の点刻は大きく疎で, 点刻間の距離は点刻直径の2~4倍.ダルマツツキノコムシ
- 上翅の点刻は小さく密で, 点刻間の距離は点刻直径の0.5~2倍.2
2. 背面の被毛は不明瞭. ♂の頭楯は一对の棘状小突起を欠く.トゲナシダルマツツキノコムシ
- 背面の被毛は明瞭. ♂の頭楯は一对の棘状小突起を具える.ケバダルマツツキノコムシ

1-12-1. ダルマツツキノコムシ *Nipponapterocis brevis* MIYATAKE, 1954

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 280, No. 3; KAWANABE, 1995, *Elytra*, 23: 168 [再記載].

体長1.28~1.68 mm, 上翅幅0.73~0.94 mm. 上翅は大きなへそ状点刻で被われる. 点刻間の距離は点刻直径の2~4倍. 前胸の点刻はより小さく密. ♂は頭楯に一对の棘状小突起を具える. 普通. 分布: 本州, 四国, 九州. 寄主菌: ツリガネタケ, ホウロクタケ, カワウソタケ, ダイダイタケ.

1-12-2. トゲナシダルマツツキノコムシ *Nipponapterocis inermis* KAWANABE, 1995

KAWANABE, 1995, *Elytra*, 23: 170.

体長1.17~1.46 mm, 上翅幅0.71~0.83 mm. ダルマツツキノコムシに酷似するが, 上翅の点刻は小さくて疎. 点刻間の距離は点刻直径の0.5~2倍. ♂の頭楯には棘状小突起がない. 現在のところ, 近畿地方だけから記録されている. 分布: 本州. 寄主菌: ダイダイタケ, ネンドタケ.

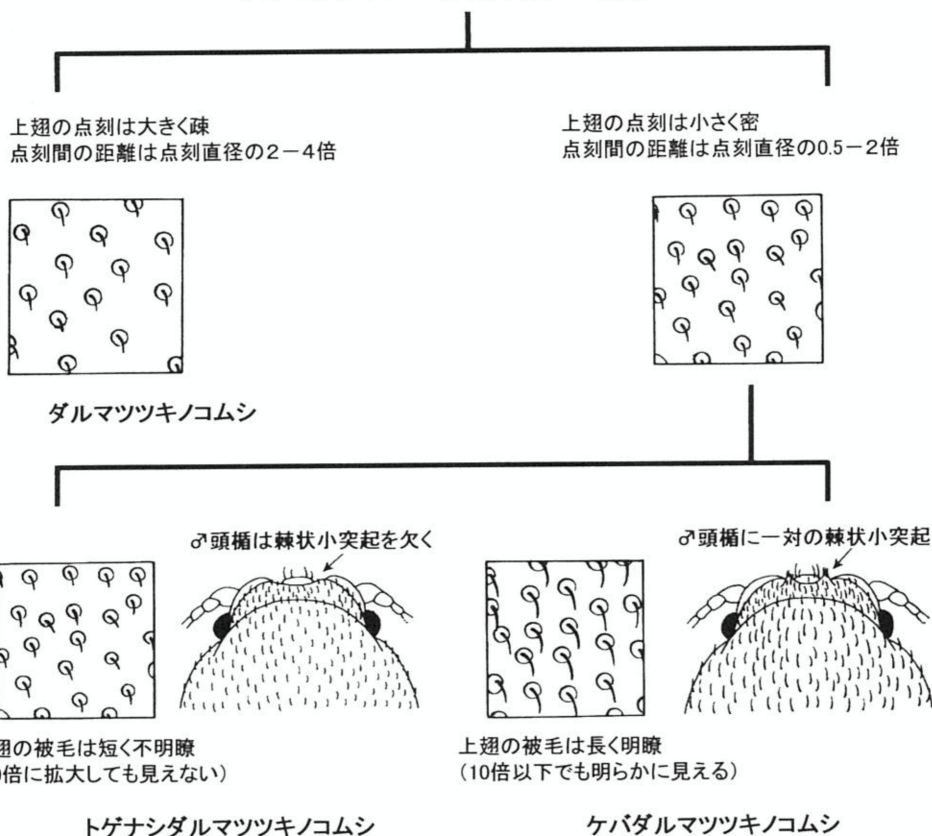
1-12-3. ケバダルマツツキノコムシ *Nipponapterocis hirsutus* KAWANABE, 1995

KAWANABE, 1995, *Elytra*, 23: 172.

体長1.14~1.41 mm, 上翅幅0.66~0.8 mm. 本属では, 各種とも上翅の点刻に細毛を具えるものの, 顕著な剛毛ではないために背面は光沢が強い. しかし本種は, 背面の被毛が相対的に長く, 低倍率でも全体が毛羽立って見えるために他種とは区別しやすい. 現在のところ, 屋久島だけから記録されている. 分布: 南西諸島. 寄主菌: *Phellinus* sp.

^{注1} Makoto KAWANABE: An illustrated guide to identification of ciid beetles of Japan, VI.

ダルマツツキノコムシ属の種への検索



1-13. エゾヒメツツキノコムシ属 *Strigocis* DURY, 1917

触角は10節, 前胸突起に幅があり両側が平行, 前胸突起を横から見ると前胸腹板中央部の高さと同様, 上翅会合部末端に屈曲線がある, などの特徴を持つ。♂は二次性徴として頭楯と前胸背板前縁に一对の三角状ないし瘤状突起を具え, 腹部腹板に腹孔がある。日本に1種, ヨーロッパに1種, 北米に2種, 南米に1種がそれぞれ分布する。

1-13-1. エゾヒメツツキノコムシ *Strigocis tokunagai* NOBUCHI, 1960

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 284, No. 29.

体長1.07~1.34 mm, 上翅幅0.48~0.6 mm. 背面は, 金色の鱗片状短剛毛で密に覆われる。♂の頭楯には一对の三角状突起を具え, 前胸背板前縁は中央でわずかに突出して2歯状になる。前胸背板の正中線沿いには被毛がなく, 背板の地が縦線状に見える。一見, エグリツツキノコムシ属の種に似る。分布: 北海道, 本州。寄主菌: ヤキフタケ。LAWRENCE (1971) によってケナガツツキノコムシ属 *Rhopalodontus* から所属が変更された。

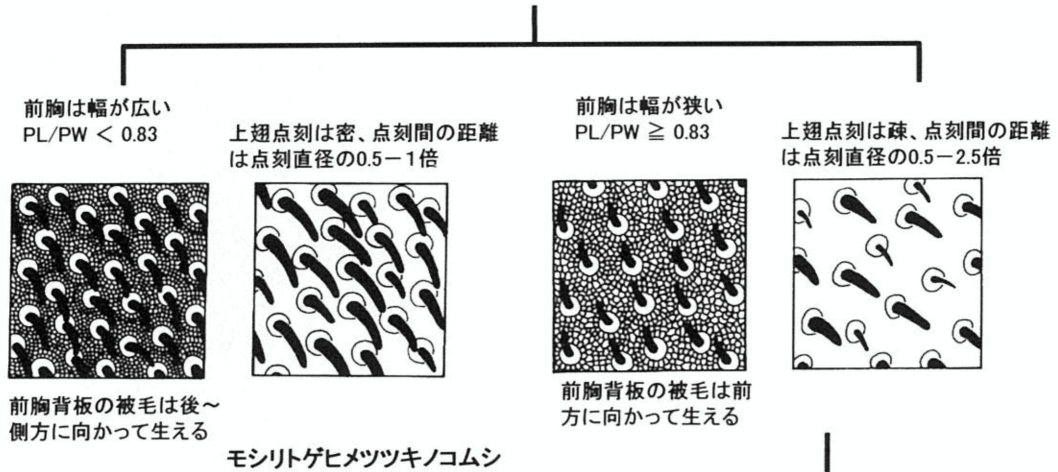
1-14. トゲヒメツツキノコムシ属 *Sulcacis* DURY, 1917

触角は9ないし10節, 前胸突起には幅があるものの後方に向かって狭まる, 前胸突起を横から見ると前胸腹板中央部の高さより突出する, 上翅会合部末端に屈曲線を欠く, などの点でエゾヒメツツキノコムシ属と区別できる。現在のところ, ユーラシア, 日本, アフリカ北部, 北米から合計7種が知られ, そのうち3種が日本に分布する。

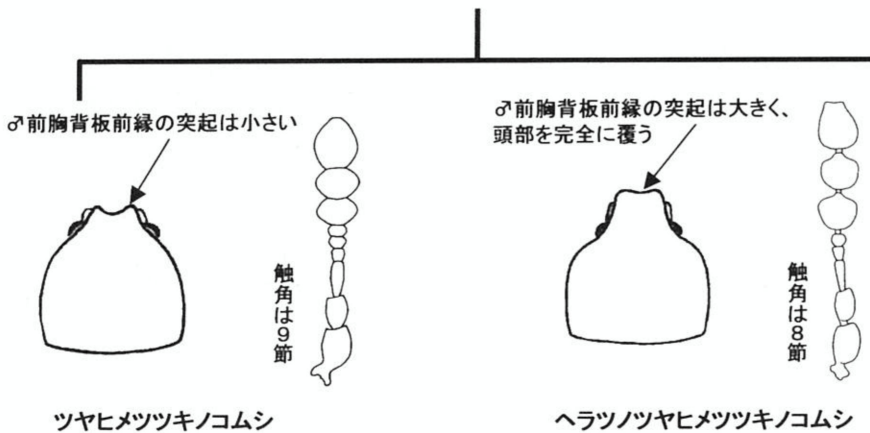
種への検索

1. 前胸は幅が広く, PL/PW は0.83未満. 上翅の点刻は密で, 点刻間の距離は点刻直径の0.5~1倍. 体は茶

トゲヒメツツキノコムシ属の種への検索



ツヤヒメツツキノコムシ属の種への検索



色ないし暗褐色。前胸背板はより濃色。頭部は明瞭な黄褐色の短剛毛で密に被われる。前胸背板の被毛は後～側方に向かって生える。

-モシリトゲヒメツツキノコムシ
- 前胸は幅が狭く、PL/PWは0.83以上。上翅の点刻は疎で、点刻間の距離は点刻直径の0.5~2.5倍。体は暗赤褐色ないし赤黒色。前胸背板と上翅は同色。頭部はやや不明瞭な銀白色の短剛毛で疎に被われる。前胸背板の被毛は前方に向かって生える。.....2
- 2. 触角は9節。体はより大きく体長1.29 mm以上。上翅の幅は0.6 mm以上。♂頭楯に一对の棘状突起を具える。上翅の点刻は部分的に列をなす。.....トゲヒメツツキノコムシ
- 触角は10節。体はより小さく体長1.31 mm以下。上翅の幅は0.61 mm以下。TL/EWは2.14以上。♂頭楯は単純で棘状突起を欠く。上翅の点刻は列状にならない。.....エゾトゲヒメツツキノコムシ

1-14-1. トゲヒメツツキノコムシ *Sulcaxis affinis* (GYLLENHAL, 1827)

保育社『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 284, No. 29; KAWANABE, 1997, *Elytra*, 25: 71 [再記載].

体長1.29~1.61 mm, 上翅幅0.6~0.76 mm. 触角

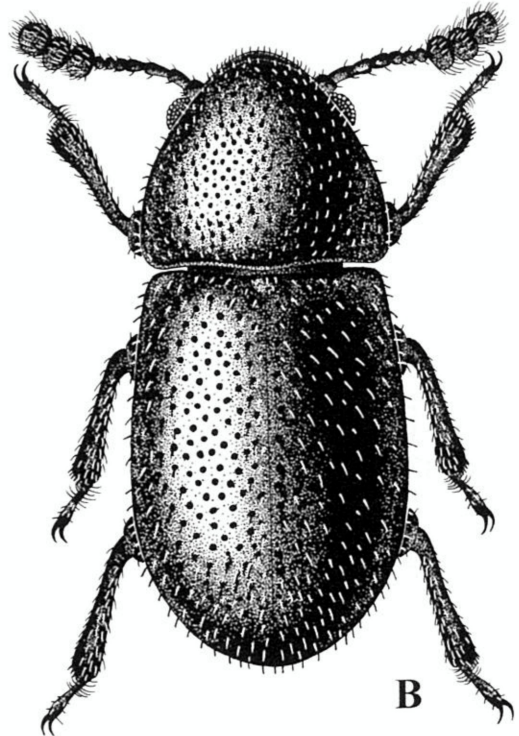
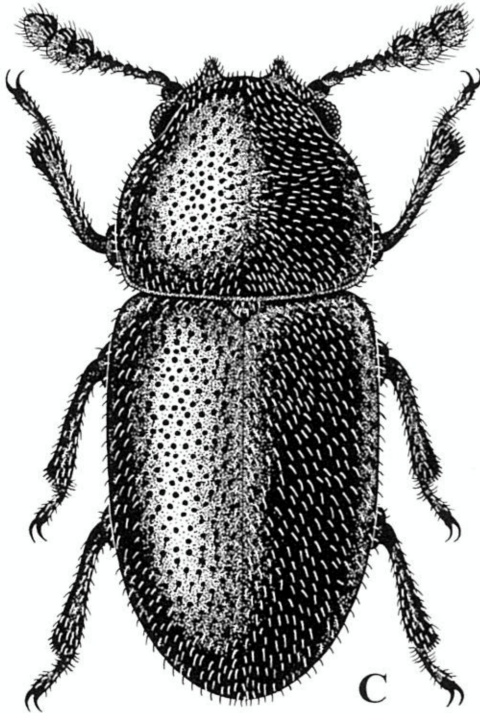
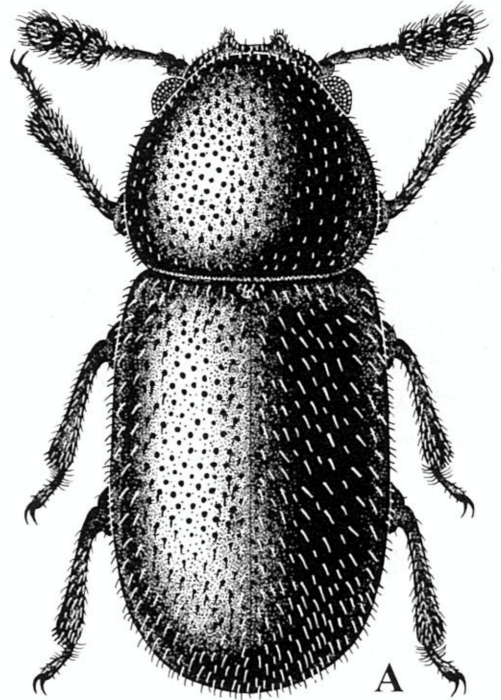


図1. トゲヒメツツキノコムシ属3種—A, トゲヒメツツキノコムシ *S. affinis*; B, エゾトゲヒメツツキノコムシ *S. japonicus*; C, モシリトゲヒメツツキノコムシ *S. nobuchii* (いずれも KAWANABE, 1997a より).

は9節。上翅の点刻は部分的に列状に並び、各点刻から黄褐色で直立した短剛毛が生じる。♂の頭楯は一对の棘状小突起を具える。北海道では普通。分布：北海道，本州（北部）；ユーラシア。寄主菌：カワラタケ，アラゲカワラタケ，チャミダレアミタケ。

1-14-2. エゾトゲヒメツツキノコムシ *Sulcaxis japonicus* (NOBUCHI, 1960)

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 284, No. 29; KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 71 [再記載，後基準標本の指定他]。

体長 1.0~1.31 mm, 上翅幅 0.46~0.61 mm. トゲヒメツツキノコムシに似るが，触角は10節で上翅の点刻が列状にならない。♂の頭楯は単純で，棘状突起を欠く。まれ。分布：北海道。寄主菌：不明。

1-14-3. モシリトゲヒメツツキノコムシ *Sulcaxis nobuchii* KAWANABE, 1997

KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 74.

体長 1.43~1.54 mm, 上翅幅 0.71~0.74 mm. 触角は10節。前胸は幅広い (PL/PW ≤ 0.83) が前方に向かって急に細まり，成熟個体では上翅よりも濃色。♂の頭楯には一对の棘状小突起を具える。トゲヒメ，エゾトゲヒメに比べて背面の剛毛は明らかに短く密生しており，かなり異なった印象を受ける。少ない。分布：北海道。寄主菌：カワラタケ。

1-15. ヒトツノツツキノコムシ属 *Paraxestocis* MIYATAKE, 1954

触角は10節，前脚脛節外縁の先端 2/3 に沿って棘を具える，前脚脛節先端外角は広がらずに単純，などの特徴を具える。現時点では，日本から1種が知られるだけである。

1-15-1. ヒトツノツツキノコムシ *Paraxestocis unicornis* MIYATAKE, 1954

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 283, No. 22.

体長 1.29~1.68 mm, 上翅幅 0.67~0.85 mm. 前胸背板の点刻は形と大きさがほぼ等しく，点刻と点刻の間は平滑。上翅の点刻は，前胸背板の点刻よりもいくぶん小さい。♂の頭楯は一对の三角状突起を具え，前胸背板前縁は隆起して1突起を形成するため「ヒトツノ状」に見える。前胸背板には，正中線に沿ってかすかに隆起線ができる。標高が比較的高い地域に生息し多くない。分布：本州，四国，九州。寄主菌：カワラタケ，ヤキフタケ。

1-16. ミツノツツキノコムシ属 *Odontocis* NAKANE et NOBUCHI, 1955

前脚脛節外角は弧状に広がり，縁に沿って棘が並ぶ。上翅会合部末端には屈曲線がある。現時点では，日本から1種が知られるだけである。

1-16-1. ミツノツツキノコムシ *Odontocis denticollis* NAKANE et NOBUCHI, 1955

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 284, No. 31.

体長 1.45~1.93 mm, 上翅幅 0.69~0.89 mm. 前胸背板は，形と大きさがほぼ等しい明瞭な点刻を密に装う。点刻と点刻の間は微細な網目状印刻で被われるため，顕著な被毛がないにもかかわらずあまり光沢がない。♂の頭楯は両側に三角状突起を具え，前胸背板前縁が隆起して3突起を形成するため「ミツノ状」に見える。北海道では平地にも普通，その他の地域ではブナ帯などの標高が比較的高い地域に生息する。分布：北海道，本州，四国，九州。寄主菌：カワラタケ，ヤキフタケ。

1-17. ツヤヒメツツキノコムシ属 *Ceracis* MELLIE, 1848

ミツノツツキノコムシ属と同様に，前脚脛節外角は弧状に広がり縁に沿って棘が並ぶが，上翅会合部末端の屈曲線を欠く。ツツキノコムシ亜科の中では比較的大きな一群を形成しており，世界で約40種，日本からは3種が知られる。なお，シコクツヤヒメツツキノコムシにはツヤヒメツツキノコムシとの間に本質的な差が見いだせず，再検討の必要があるため，検索図と検索表には掲載しなかった。

種への検索

- 触角は9節。体は多少幅広く，♂は TL/EW が 2.45 以下，PL/PW が 1.0 以下，EL/PL が 1.5 以上。♀は PL/PW が 0.96 以下。前胸背板の点刻は相対的に大きく密で，点刻間の距離は点刻直径の 1~3 倍。♂前胸背板前縁の M 型の突起は，頭部の先端を越えないため，上から見ると頭部が見える。
.....ツヤヒメツツキノコムシ
- 触角は8節。体は細長く，♂は TL/EW が 2.5 以上，PL/PW が 1.04 以上，EL/PL が 1.5 未満。♀は PL/PW が 1.0 以上。前胸背板の点刻は細かく疎で，点刻間の距離は点刻直径の 1~8 倍。♂前胸背板前縁のへ

ら状の太い突起は、頭部の先端を越えて伸びるため、上から見ると頭部が隠れて見えない。

.....ヘラツノツヤヒメツツキノコムシ

1-17-1. ツヤヒメツツキノコムシ *Ceracis japonus* (REITTER, 1878)

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 284, No. 32.

体長 1.12~1.31 mm, 上翅幅 0.48~0.56 mm. 触角は 9 節, 頭頂部は強く凹む。体は強く膨隆し円筒状。前胸背板は小さな点刻で密に被われ, 点刻と点刻の間は不明瞭で微細な網目状印刻で被われるため, 顕著な被毛がないにもかかわらずあまり光沢がない。♂の頭楯には上反する台形の突起があり, 前胸背板前縁にも M 型の突起がある。あまり多くない。分布: 本州, 四国, 九州, 対馬。寄主菌: カワウソタケ, ネンドタケ, アズマタケ。

1-17-2. シコクツヤヒメツツキノコムシ *Ceracis shikokuensis* (MIYATAKE, 1954)

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 284, No. 32.

ツヤヒメツツキノコムシとの間に本質的な差異が見いだせず, 再検討の余地がある。分布: 四国。寄主菌: カワウソタケ。

1-17-3. ヘラツノツヤヒメツツキノコムシ *Ceracis lamnicollis* MIYATAKE, 1982 (和名新称)

MIYATAKE, 1982, Spec. Iss. Emer. Prof. M. CHŪJŌ, 77.

体長 1.11~1.38 mm, 上翅幅 0.44~0.51 mm. 触角は 8 節。ツヤヒメツツキノコムシに比べて, 前胸背板の点刻が細かく疎で, 点刻間の距離は点刻直径の 1~8 倍。♂の頭楯には上反する M 型の突起があり, 前胸背板前縁にも大型でへら状の突起がある。前胸の突起は, 完全に頭部を被うほど大きい。あまり多くない。分布: 南西諸島; 台湾。寄主菌: ネンドタケ, ヒイロタケ。

((株)人と自然の環境研究所)

○天子山地熊森山でホソヒメクロオサムシを採集

静岡県富士宮市と山梨県下都町の県境に位置する天子山地(天守山地)熊森山(熊盛山)において, 2002 年 9 月, 2003 年 6~7 月, 2004 年 5~6 月の 3 回に渡り, ベイトトラップによるホソヒメクロオサムシ *Pentacarabus harmandi* の生息調査を行い, 2003 年と 2004 年に少数が採集されたので報告する。

2♀♀, 20. VI.~13. VII. 2003; 2♂♂4♀♀, 24. V.~2. VI. 2004; 2♀♀, 2. VI.~13. VI. 2004; 4♂♂3♀♀, 13. VI.~22. VI. 2004. いずれも館野 鴻, 蕭嘉廣採集。

調査地は 50 m 前後の礫が多い急傾斜地で, ベイトトラップを設置した標高は概ね 1,300~1,570 m の間である。

天子山地での調査は蕭嘉廣氏の提案によるもので, 当山地でのホソヒメクロオサムシの記録はこれまで無い様思う。

末筆ながら調査に協力いただいた岩崎昌弘, 井ノ上 健, 佐藤寛恵, 西川 寛, 久保田七海の各氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

井村有希・水沢清行, 2002. ホソヒメクロオサムシの 3 新亜種. 月刊むし, (380): 2-6.

(神奈川県秦野市, 館野 鴻)

○埼玉県におけるクロトゲハムシの記録

クロトゲハムシ *Hispellinus moerens* (BALY) は本州・四国・九州に分布することが知られているが(木元・滝沢, 1994), 吉越ほか(1998)によると埼玉県では未記録のようである。筆者は, 以下のとおり埼玉県において本種を確認するとともに, 成虫の食餌植物について知見を得ているので報告する。

3 exs., 埼玉県川口市差間, 23. V. 2004, 筆者採集; 5 exs., 埼玉県さいたま市桜区田島, 4. VIII. 2003, 筆者採集; 2 exs., 埼玉県さいたま市緑区下山口新田, 23. V. 2004, 筆者採集

本種の成虫の食餌植物について, 木元・滝沢(1994)ではススキ *Miscanthus sinensis* が載録されているが, オギ *Miscanthus sacchariflorus* の葉を摂食することを確認した。また, 2003 年 8 月 4 日にはオギの葉上で交尾する個体も見られた。今後, オギへの産卵や幼虫の摂食があるか否かについて明らかにしていきたい。

参考文献

木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会.

吉越肇ほか, 1998. 埼玉県の鞘翅目(甲虫類). 埼玉県昆虫誌 III. 埼玉昆虫談話会: 93-340.

(埼玉県さいたま市, 岩井大輔)

白水先生を偲ぶ、お目にかけたかった写真

佐藤正孝

白水隆先生の訃報に接したのは、台湾の山中であったこともあり、何の手立ても出来ないままに日は過ぎていった。そこで、ここに思い出の一端を綴り、白水先生を偲ぶ縁としたい。蝶の白水先生と甲虫を研究対象にしている私としては、接点がないようであるが、虫好きな先生には色々と学生時代からご指導いただいたものである。白水先生は、私の大学の恩師である石原保先生が九大奉職中に机を並べられていたこともあって特に親しくしていただいた。初めて先生にお会いしたのは、確か大学2年の折に対馬へ採集に行く途中、研究室をお訪ねしたときである。まだ駆け出しの私を、丁寧に迎えて下さり、水生甲虫を始めたばかりの私に色々な標本を恵み下さった。その折に文献の整理方法についてもお見せくださり、ご指導くださったことは、後の私の研究に大きな影響を残した。お話の中に、甲虫にもかなり興味をお持ちの様子がありありとうかがわれ、デオキノコムシ、トゲハムシ、マルウシカなどなどの標本を見せていただいた。また、その成果は後に公表されたが、その経緯については甲虫ニュース100号記念の折に、思い出と共にご執筆いただいた。その後色々な場でお会いする機会がある度に、研究の進展をお話して激励を受けたことは言うまでもない。近年は、お会いする機会も少なくなり、環境省のRDBの委員会でお会いできるのを楽しみにしていたが、残念ながらもうそれも叶わなくなってしまった。



先生が酒好きであったことはとみに有名であるが、そのあたりのエピソードもこの機会に綴ってみたい。石原先生は、若い頃は特に謹厳実直であったせいもあり、酒を嗜むこともなかったようで、九大時代、夕方仕事を終え一杯飲みに行こうと白水先生がさそうと「そんな気狂水を飲んでいる暇がない」とよく叱られたものであると先生から伺ったこともある。その石原先生も晩年はウィスキーをかなり嗜まれるようになり、体質的にアルコールの飲めない私に「君は人生の楽しみのひとつを知らない」とよく諭されたものである。

かつて、名古屋で鱗翅学会の大会が南山大学で開催された折、白水先生が午前中時間が空いたからと私の研究室をお訪ねくださった。午後から評議員会とのことで、昼食にと近くのレストランへご案内し、食事の前にビールをお勧めしたのであるが、午後からの予定があるからと最初はお断りになった。しかし、食事の途中でやはり1本だけ貰おうかといわれ、それが2本3本と重なり、私のほうが気が気でなくなった。それでも時間一杯まで楽しまれ、タクシーで駆けつけられたことがあった。やはりアルコールがお好きであると同時に、飲んでも飲まれないことに感心したものである。

1961年に鱗翅学会が主宰して行われた台湾の昆虫調査で多くの標本を持ち帰られた。その中には、誰も気に止めないようなチビドロムシが沢山含まれていた。それをまだ大学生であった私に研究を任せられ、ご期待に添うべく台湾のチビドロムシを纏めたことは懐かしい思い出であると同時に、先生のご好意があったからこそとの思いで一杯である。さらに、私の甲虫類への対象の幅が広がるにつれ、採集された甲虫類の関係ある群を

お送りいただいたことは、虫好きな先生の一面を物語っていると思うと共に感謝にたえない。

昨年(2003年)の11月中国四川省を訪れた折に、成都の郊外にあるパンダ養育施設に案内され、中に博物館相当の施設があり蝶類の展示があるとのことで訪れた。その中で白水先生の業績が一段と大きなポートレートと共に展示してあって、中国でも評価の高いことを知った。帰ったらこの写真の様子を先生にお知らせしなければと思いつつ、その後次々と国外へ出ることばかりが先行して失礼しているうちに幽明を境することとなってしまったことは返すがえすも残念な思いである。ここに、是非白水先生にお目にかけてなかったこの時の写真を掲載して、先生のご活躍を偲ぶがよすがとしたい。

(名古屋市緑区)

白水隆先生の黄泉からの葉書

高 桑 正 敏

突然に『白水先生逝去』という題のメールが届いたのは、2004年4月2日22時過ぎであった。『本日の夕方6時50分に白水隆先生が逝去されました』と記されていた。呆然とした気持ちの中で、もう仕事を続ける気などなかった。お酒が好きだった先生に献杯しながら、生前のご厚意にお礼を申し上げた。

思い起こせば、個人的にも大変にかわいがっていただいた。その最初は、私が1968年に京浜昆虫同好会の「はばたき」に屋久島紀行を書いたときだった。信じられないことに、そのお褒めの葉書を会事務局に寄せてくださり、『高桑という人は知らないけれど』『北杜夫さんのような文章を書く人になるでしょう』的な持ち上げ方をしてくれたのである。雲の上の存在であった先生からのメッセージは、田舎学生同然だった私をいかに有頂天にさせたことか、そしていかに大きな自信を持たせたことか。1971年の「月刊むし」創設のさいにも励ましの言葉を寄せてくださるとともに、1号には「蝶界の回顧」記事を無償で書いてくださった。「月刊むし」創設は若かった私たちの無謀とも言える行動だったが、それがとにもかくにも続いた背景の1つに先生のご援助があったはずである。このように、先生によって私たちはどれほど大きな力を与えられ、勇気づけられたか、計り知れないものがある。また、私が台湾でのある採集行為を糾弾したときなども、わざわざ声をかけてくれ大変に励ましてくれた。温厚な方と想っていただけに、意外な感すらあった。

先生はまた、「葉書魔」でもあった。「葉書魔」などと表現するのは不謹慎かもしれないが、若輩者のこちらが申し訳ないと恐縮するほど、ことあるごとに先生の方から葉書や手紙を頂戴した。正直に言ってしまうと、

郵便はがき



福岡市西区野方
白水隆 28

25000311

小田原市入生田 499
神奈川県立博物館
高桑正敏 宛

01190043

写真 平成 16 年 8 月 12 日消印の白水先生からの葉書

その頃は恐縮さとともにそのお返事をしなければならないというプレッシャーがあって、なぜか気後れしてしまうこともあった。もちろん今となってみればまったく贅沢な話で、先生のあのこまかで整然と書かれた達筆の葉書をもういただけないと思うと、なんとも寂しく感じてしまう。

白水先生は甲虫の採集もお好きであった。とりわけ、私が研究対象としているハナノミに興味をもたれていたようであった。というのも、台湾でオビハナノミ属 *Glipa* をクワズイモ葉上からたくさん採集したという自慢話を何回か伺ったし、故野村鎮先生が1967年に台湾のハナノミをまとめられたさいには白水先生採集の多数の標本が使用されていたからである。そもそも、ハナノミ科で先生に献名された *shirozui* と *takashii* は計5つもある。畑違いの分類群でこれほど多く献名されるのはよほどのことであるまいか。残念ながらそのうちのタクソンの1つ、*Glipa shirozui takashii* (オオオビハナノミ台湾亜種) は他の種のシノニムであると申し上げたときの、がっかりされたお顔をよく覚えている。おそらく、種小名と亜種小名の双方に献名された学名を相当に気にいっておられたのであろう。

さて、「甲虫ニュース」に白水先生の追悼記事を書かねばなるまいと思っていたものの、なんとなく書きそびれたままぐげも過ぎてしまっていた。すでに、立て続けに「月刊むし」はじめたさんの雑誌に追悼の記事が寄せられており、私のような甲虫の世界の人間がいまさらという気分になっていたこともある。正にそのようなときだった。勤務先の博物館宛に1通の葉書が届いたのである。「あれ?見慣れた文字だな?」と手に取って愕然とした。それは確かに白水先生からだったのである(写真)。夢を見ているような錯覚を覚えつつ裏面を見ると、そこには晩年のよき奥様であった房江さんから『何かお出しつものようですが、本人は忘れてしまいこんであります。消せるようにエンピツにて失礼』と記されていた。かなり黄ばんでいたから、もう何年も前のことであつたのだろう。しかし私にとっては、いつまでも追悼の辞を書こうとしない私に対し、先生が黄泉の世界から葉書をくださったのだととっさに感じて、背筋が凍りついた。と言うのも、この日は8月13日、つまり新盆であつたからである。

いつもいつも律儀に葉書をくださった白水先生が、不義理にもつつい甘えようとする私を叱責されたとしか思えない。感謝と反省の念を込めて、合掌。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

白水先生を偲んで

大平 仁夫

白水先生は、チョウ類の研究者として知られているが、甲虫類もお好きだったようで、トゲハムシ [*Sieboldia*, 2 (1): 53-56, 2957] や対馬のハムシ [*Sieboldia*, 2 (1): 57-68, 1957] やデオキノコムシ [*Sieboldia*, 3 (1): 55-90, 1963] なども共著であるがお書きになっている。私は先生が台湾で採集されたコメツキムシを1966~1967に発表する機会を得たが、他にも海外遠征された折りの採集品を頂戴したこともあるし、KoreaのCheju島産のは先生のご希望で共著としてまとめたが、手違いがあつてまだ世に出ないままになっている。先生からは些細なことでも返事を頂いていたし、どんなことでも相談できる先生であつたので、本当にかげがえのない指導者を失い残念でならない。

私は先生と直接お話しする機会はあまりなかったが、いまから30数年前に福岡へ行く機会があり、九州大学教養部の先生の研究室を訪れたことがある。先生は部屋で待っていてくださって、私のようなものに対して、今の身分はどうなっているかとか、生活はどうしているかとか、これからどうしてゆくのかなど、昆虫以外のことでもいろいろ私の身上について心配して頂いたことをよく覚えている。そのとき、先生が講義に使っておられた昆虫類の学名のつけかたのテキストを、これも読んでみてはと言ってくくださったし、その後に先生の著書を頂戴したこともある。

先生が多くの昆虫同好者に尊敬され慕われていたのは、「1人で見ると限りがあつると全国に散るアマチュア研究者との交流を何より大切にされた」(朝日夕・26-IV-2004) 先生のお人柄によるところが大きいと思われる。私は、これからの自身の余生を、先生から受けた有形無形の恩をよくかみしめて過ごしたいと思う。先生のご冥福を心からお祈りする。

(岡崎市舞木町)

○ケムネチイロアリヅカムシの採集例

Batristilbus trichothorax TANOKUCHI ケムネチイロアリヅカムシは TANOKUCHI (1988) によって神奈川県逗子市神武寺境内より得られた標本を基に記載された。本種は好蟻性と考えられ、*Lasius hayashii* YAMAUCHI et HAYASHIDA ハヤシケアリの巣から採集されることが報じられている。一見、*B. politus* SHARP エグリチイロアリヅカムシと大変よく似ているが、エグリチイロは前胸背板にまったく毛をもたないのに対し、本種では粗くまばらに毛をもつという点で容易に区別できる。

原記載以外の記録としては、佐賀県(西田・廣川, 1990)、宮崎県(野村・永井, 1995)がある。また平野(1984)は鹿児島県から *Batristilbus* sp. を記録しており、この種について野村(1996)は本種ではないかと指摘している。今回、平野氏本人にこの標本を再度確認して頂いたところ、本種であるとのことであった。いずれにせよ、採集されている個体も少なく、大変珍しい種のように、15 年以上採集されていなかった。

筆者らの一人、小野は東限の記録となる千葉県より本種を採集しているので報告する。

1♀(図 1)、君津市三船山(図 2)、1. V. 2004、ホスト: *L. japonicus* SANTSCH トビイロケアリ; 1♀, 同所, 21. VI. 2004、ホスト: ハヤシケアリ。すべて小野採集、新井同定・保管。アリの同定は丸山宗利博士による。

採集地点は林道に沿った、南東向きの陽当たりの良い斜面である。周辺の植生はマテバシイ、コナラ、



図 2. 生息環境: 千葉県君津市三船山。

サクラ等が主で、定期的の下草が刈られているためにかなり明るく、開けている。林床には間伐材が多数放置されており、それらの中にはケアリ類がコロニーを形成していた。好蟻性昆虫を採集する目的でそれらを次々に起こしていったところ、ホストのアリに紛れて歩いている本種を発見、採集した。

トビイロケアリの巣から得られたのは初めてであるが、本種の寄種がさほど厳密に限られているものではないためと思われる。ハヤシケアリもトビイロケアリも普通種のアリであるのに、なぜ本種が採集されないのか? 分布がわかっている場所も九州と関東というもの不思議である。そこで、関東での産地が三浦半島と房総半島という温暖な地域であることに注目したい。また、ケアリ類は石の下にも多数営巣するのに、本種が採集されているのは、TANOKUCHI (1988) では落葉樹の根元、野村(1996)では、朽木の樹皮下から採集されたとある。今回の採集状況・これらの情報をまとめると、本種の生息場所は、比較的温暖な地域で、落葉・照葉樹林が広がり、ケアリ類が樹皮や朽木下に営巣しているところではないかと考えられる。いずれにせよ、標本・情報不足であるので、今後の採集に期待したい。

末筆ながら、本種に関する情報をご教示くださった小田原市の平野幸彦氏ならびに国立科学博物館の野村周平博士、アリの同定して頂いた同館の丸山宗利博士の各氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- TANOKUCHI, Y., 1988. Notes on the genus *Batristilbus* RAFFRAY (Coleoptera, Pselaphidae). *Ent. Rev. Japan*, 53: 69-76.
- 平野幸彦, 1984. 神奈川県産蟻塚虫覚え書 I. 神奈川虫報, (73): 10-14.
- 西田光康・廣川典範, 1990. 1989・1990年に採集した背振山系の甲虫。佐賀の昆虫, (24): 205-217.
- 野村周平, 1996. 佐賀県のアリヅカムシ。松浦博ら編 佐賀県の生物, pp. 263-279.
- 野村周平・永井 彪, 1995. 宮崎県産アリヅカムシ科。タテハモドキ, (31): 19-27.

(埼玉県嵐山町, 新井志保)
(千葉県君津市, 小野広樹)



図 1. 千葉県産ケムネチイロアリヅカムシ♀。

アメイロコメツキ雌の形態について

大平仁夫・豊島健太郎・堀 繁久

Notes on the female structure of *Kometsukia vesticornis* from Japan
(Coleoptera, Elateridae, Ampedini)

Hitoo ÔHIRA, Kentarou TOYOSHIMA and Shigehisa HORI

アメイロコメツキ *Kometsukia vesticornis* は、鳥取県大山において採集された 1 雄個体に基づいて、KISHII (1957) が新属新種として記載した種である。体長は 11~13 mm 内外、体は黒褐色（黒鉛色）を呈し、触角と肢は暗褐色である。雄触角の第 2・3 節は短小でほぼ等長、第 4 節から顕著に鋸歯状を呈し、各節の鋸歯状部の縁面に直立状毛を生じるなどの特徴があり、類似種との識別は容易である。

原記載以降、本種は北海道から九州（対馬・屋久島を含む）の各地から点々と記録されているが、個体数はどこでも多くなく、たまたま燈火に飛来した成虫を見出す程度である。雄成虫の形態の概要は大平 (1998) が報告している。しかし、現在までに記録のあるものはすべて雄であって、雌は豊島 (2003) による岐阜県白川村で

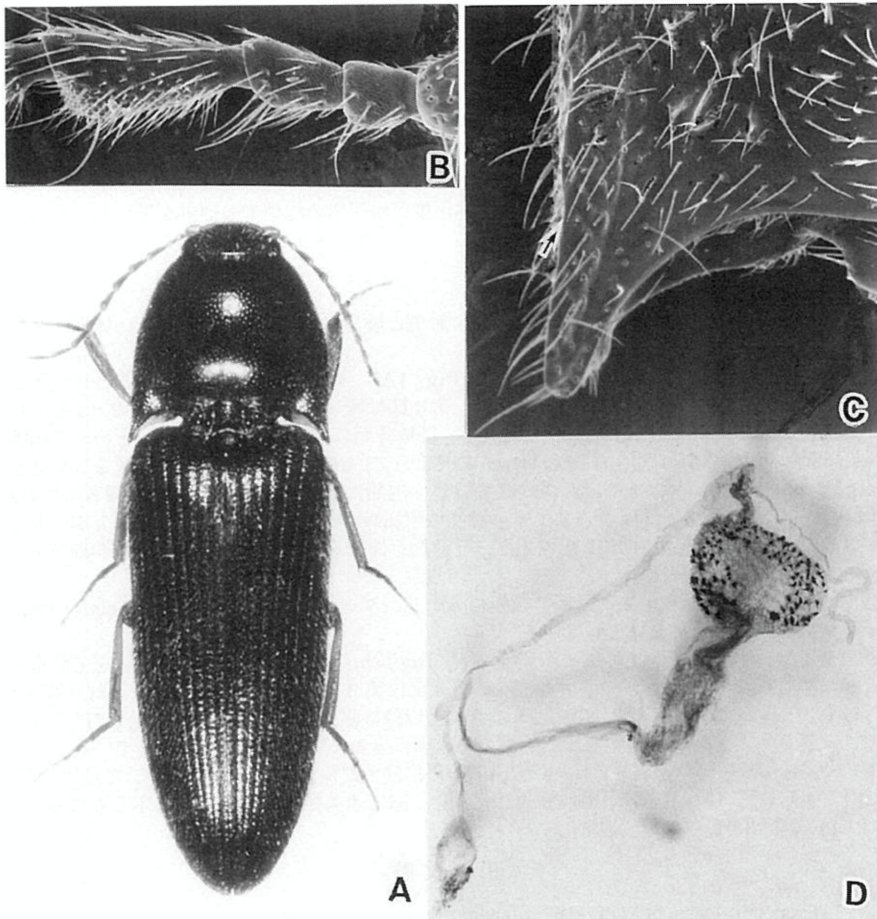


Fig. 1. A-D, Some structure of female of *K. vesticornis*. (A, from Sapporo in Hokkaido; B-D, from Neo-mura in Gifu Pref.). A, body length 13 mm; B, 2nd to 4th segments of antenna; C, left hind corner of pronotum; D, internal reproductive organs.

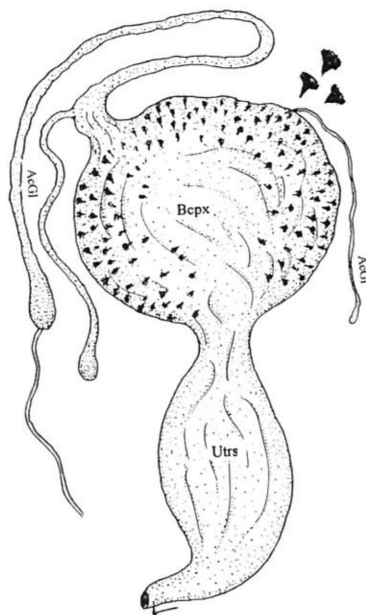


Fig. 2. Outline of the female internal reproductive organs of *K. vesticornis*. (from Neo-mura in Gifu Pref.)

燈火に飛来した 1 個体があるのみと思われる。

本文を草するにあたり、札幌市の宮田達美氏と桜井正俊氏が採集の雌標本の提供を頂いた。心から感謝の意を表す。

雌形態の概要

体長は 11~13 mm 内外。体は黒褐色（黒胎色）で、触角と肢は赤褐色、体毛は褐色で、体形と体色の概要は雄個体と同じである。

触角は短く、末端は前胸背板の後角には達しない (Fig. 1A)。第 2 節は短小で幅と長さはほぼ等しく、第 3 節は第 2 節よりやや長く、第 4 節から鋸歯状を呈し、第 4 節は第 3 節の 2 倍程度で、第 2・3 節を合わせたものよりわずかに長い程度である (Fig. 1B)。前胸背板の後角背面の各 2 本の隆起腺は、きわめて明瞭に印する (Fig. 1C)。内部生殖器の外形は図示 (Figs. 1D; 2) したようで、uterus (Utrs) は楕円形状をした軟弱な袋である。bursa copulatrix (Bcpx) は球状に近い軟弱な袋で、内部には不規則に生じる 100 個あまりの鋌状 (peg-like) の硬針状物を分布、袋の上端部からは 1 本の細長い附属腺 (AcGl) と、末端部からは 1 本（基部近くで 2 本に分枝する）のやや太い附属腺 (AcGl) とを生じ、その長く伸びる末端からさらに細い腺が伸び、その先端は spermatheca に達すると思われる。

本種の雌については、豊島 (2003) が近属で類似種のアラハダチャイロコメツキ *Reitterelater rugipennis* と比較して、触角には直立状毛がないとしている。

筆者らの調査では、本種の雌は、近属で類似種の *R. rugipennis* の雌に比して、下記の点で識別できる。1) 触角の第 3 節は第 2 節の 1.2~1.3 倍の長さを有し、第 4 節は第 3 節の約 2 倍の長さで、これら第 2・3 節を合わせたものの 1.2 倍程度の長さである。2) 触角の第 4 節以降の鋸歯状部縁には直立状毛を有しない。3) 前胸背板の後角には各 2 本の隆起腺を有するが、外側の隆起腺はきわめて明瞭でよく発達している。

調査標本: 1♀, 岐阜県根尾村温見峠, 10-VII-1997, 豊島健太郎採集 (Fig. 1 に分解して示した個体と Fig. 2 に示した内部生殖器); 1♀, 札幌市円山, 9-VIII-2000, 宮田達美採集 (Fig. 1A に示した標本); 1♀, 野幌市森林公園, 11-VII-2001, 桜井正俊採集。

引用文献

KISHII, T., 1957. Some new forms of Elateridae in Japan (III). *Ent. Rev. Japan*, 8: 10-12.

大平仁夫, 1998. 九州に産するコメツキシ科の珍種 (68). 北九州の昆虫, 45: 107-108.

豊島健太郎, 2003. 岐阜県で採集した珍しいコメツキシ科の甲虫 (1). 啓蟄, 19(43): 46-48.

(大平: 岡崎市舞木町; 豊島: 岐阜市北一色町; 堀: 札幌市厚別区)

福岡県・佐賀県におけるセスジダルマガムシ属 4 種の採集記録

中島 淳・緒方 健

これまでのところ、福岡県及び佐賀県におけるセスジダルマガムシ属 *Ochthebius* に関する分布記録はないようである。2002 年から 2004 年にかけて、筆者らは福岡県及び佐賀県において九州初記録の種を含む 4 種のセスジダルマガムシ属を採集しているのでここに報告する。なお、種の同定は吉富ほか (2000) に従った。

1. ハセガワダルマガムシ *Ochthebius hasegawai* NAKANE & MATSUI

6 exs., 佐賀県富士町東畑瀬 (嘉瀬川), 30. III. 2002, 中島採集保管。

8 exs., 佐賀県背振村山神 (城原川), 16. VII. 2003, 中島採集保管; 10 exs., 同, 緒方採集保管。

1 ex., 福岡県筑紫野市袖須原 (宝満川), 26. V. 2004, 緒方採集保管。

3 exs., 福岡県添田町津野 (今川), 20. VI. 2004, 中島採集保管。

吉富ほか (2000) によれば本属中最も普通の種とされる。一般的に水面に突き出た岩石の水面より上の水際に生息する種であるが、佐賀県背振村山神では増水により完全に水中に没した岩表面の蘚苔類上より得られた。当時、当地では雨が降り続いており、この岩も一週間ほどは水面下に没していたものと考えられ、この程度の期間であれば水中での生存は可能であろう。また、富士町東畑瀬周辺ではダム工事が始まっており、当採集地点も近々ダムの底に沈むこととなる。

2. ナカネダルマガムシ *Ochthebius nakanei* MATSUI

4 exs., 福岡県那珂川町中木戸 (那珂川), 22. V. 2002, 中島採集保管。

1 ex., 福岡県添田町津野 (今川), 20. VI. 2004, 中島採集保管。

比較的開けた清流の水面に出た岩の水際にて得られた。

3. ホンシュウセスジダルマガムシ *Ochthebius japonicus* JÄCH

7 exs., 福岡県豊前市下河内 (岩岳川), 22. VI. 2003, 中島採集保管; 12 exs., 同, 緒方採集保管。

8 exs., 福岡県添田町津野 (今川), 20. VI. 2004, 中島採集保管。

九州初記録である。両採集地共に個体数は比較的多かった。従来本州から知られていた種であるが、上手ほか (2003) により、四国からも記録された。九州においても豊前海 (瀬戸内海) に流入する河川には広く生息している可能性が高い。



写真 1. ホンシュウセスジダルマガムシ (福岡県豊前市下河内産)。

4. セスジダルマガムシ *Ochthebius inermis* SHARP

1 ex., 福岡県那珂川町中木戸 (那珂川), 24. V. 2002, 中島採集保管。

河川中流域の河川敷にある岩盤の水溜りにおいて、アオミドロの中より得られた。

近年、日本各地で河川環境の荒廃が問題視されているが、九州においてもダム工事や河川改修などにより、河川性セスジダルマガムシ類の好むような環境は次々と失われている。したがって、その生息地及び生息数は減少しているものと考えられるが、気をつけて採集しなければ見落としてしまうような種ばかりのため、九州

における分布記録自体が極めて少なく、詳細は不明である。また、今回採集した地点の中では福岡県添田町津野においてハセガワダルマガムシ、ナカネダルマガムシ、ホンシュウセスジダルマガムシの 3 種が同所的に採集されている。極めて似たハビタットを利用する異なる三種が同所的に生息していることは生態学的にも興味深い。

河川性のセスジダルマガムシ類は一見目立たなく地味な甲虫であるが、コツを掴めば採集も容易であり、比較的環境の良好な清流に多いことから河川環境の何らかの指標種になりうるものと考えられる。そのためにも、今後とも本属種の分布記録、また生活史に関する知見のより一層の蓄積が望まれる。

参考文献

上手雄貴・藤本博文・吉富博之, 2003. 四国で採集したセスジダルマガムシ属. 甲虫ニュース, (142): 18.

吉富博之, 2003. 日本産ダルマガムシ科. 昆虫と自然, 38(2): 23-26.

吉富博之・松井英司・佐藤光一・疋田直之, 2000. 日本産セスジダルマガムシ属概説. 甲虫ニュース, (130): 5-11.

(中島: 九州大学大学院生物資源環境科学府水族生産学研究室)

(緒方: 福岡県保健環境研究所)

○クリイロカッコウムシ西表島の記録

クリイロカッコウムシ *Platytenerus castaneus* (KONO) を西表島で採集しているので報告する。

1 ex., 沖縄県八重山群西表島白浜～祖納, 8. VI. 1997, 田中 稔採集。

白浜～祖納間にある農業用堰堤近くのナイターで採集した。「原色日本甲虫図鑑 III」(1985)には本種の西表島の記録はない。

引用文献

黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III). 500 pp. 保育社, 大阪.

(兵庫県西宮市, 田中 稔)

○アオオサムシの冬季活動

近年は暖冬の年が続いているが、2004 年も年初から暖かい日が多かった。私の住む東京都国分寺では、1 月 1 日の元旦も、小春日和を思わせる 1 日であった。その元旦の朝、自宅近所の東京経済大学(国分寺市南町)付近を散歩中に、道路脇で活動しているアオオサムシ (*Ohomopterus insulicola kantoensis* ISHIKAWA et UJIE, 2000) の 1 雄個体を目撃した。都内とはいえ、国分寺のアオオサムシは普通にみられる甲虫である。最初は一瞥しただけであったが、ふと季節が真冬であることを思い起こし、その場に立ち止まり観察を続けた。この個体は、春季以降の通常の活動期と同様に、枯葉の間を盛んに歩行しており、よく見ると生きているミミズをくわえている。アオオサムシに捕らえられた状況から、おそらくこのミミズも活動中であったのだろう。

年により違いはあるものの、少なくとも関東平野では、アオオサムシは、年明け後には完全な越冬体勢にはいるもの、と私は認識していた。今回観察されたような冬季活動が、温暖化が進行するにつれて、むしろ常態になってくるのかどうか、今後の注意を喚起しておきたい。

温暖化にともなう昆虫類に及ぶ影響は、分布移動や寒冷適応性種の衰退など、温度耐性が、一般には注目されがちである。一方、このアオオサムシのような休眠期における活動は、フェノロジー(生物季節)の乱れに波及する現象であり、彼らおよび相互関係をもつ生物にとって、資源利用や繁殖戦略のうえできわめて不利に働くことは間違いないであろう。

断片的な観察ノートであるが、温暖化と甲虫類に関する参考資料として報告した次第である。

(東京都国分寺市, 新里達也)



写真 西表島産クリイロカッコウムシ

***Astenus setifer* トゲトゲハネカクシは好蟻性の種であった**

新井 浩 二

Astenus (Eurysunius) setifer CAMERON, 1930 は本邦産 *Astenus* 属 (ハネカクシ科, アリガタハネカクシ亜科) のなかでは特異な形態を持つ種として知られ, またこれまでにわずかな記録があるのみのたいへん珍しい種でもある. この種の分類学的な知見や形態等については柴田 (1995) が詳しく解説し, その存在が一般に知られることとなった. ただし採集例が少ないため, 生態的な知見はこれまでにわずかで断片的なものが確認されているに過ぎない.

筆者はこの度, 本種がフタフシアリ亜科の蟻類と関係を持つ好蟻性のハネカクシであることを確認したので, 生態的な知見を含めて報告する. なお, 以前より課題となっていた本種の和名について柴田氏や丸山博士と協議した結果, これまで *Astenus* 属の種に用いられているシリグロという和名は本種には当てはまらず, むしろ全く別の和名をつけてはどうかということになり, 学名の「剛毛がある」という意味から「トゲトゲハネカクシ」が良いということで, 今回の報告において和名新称とした.

2♀, 埼玉県嵐山町吉田, 26. V. 1999; 1♀, 同所, 27. V. 1999; 1♂, 同町鎌形, 16. I. 2000; 1♂1♀, 埼玉県川本町鹿島, 3. XI. 2003; 4♂♂1♀, 同所, 14. III. 2004; 1♂1♀, 埼玉県鳩山町石坂, 27. III. 2004, いずれも筆者採集, 保管 (図1).

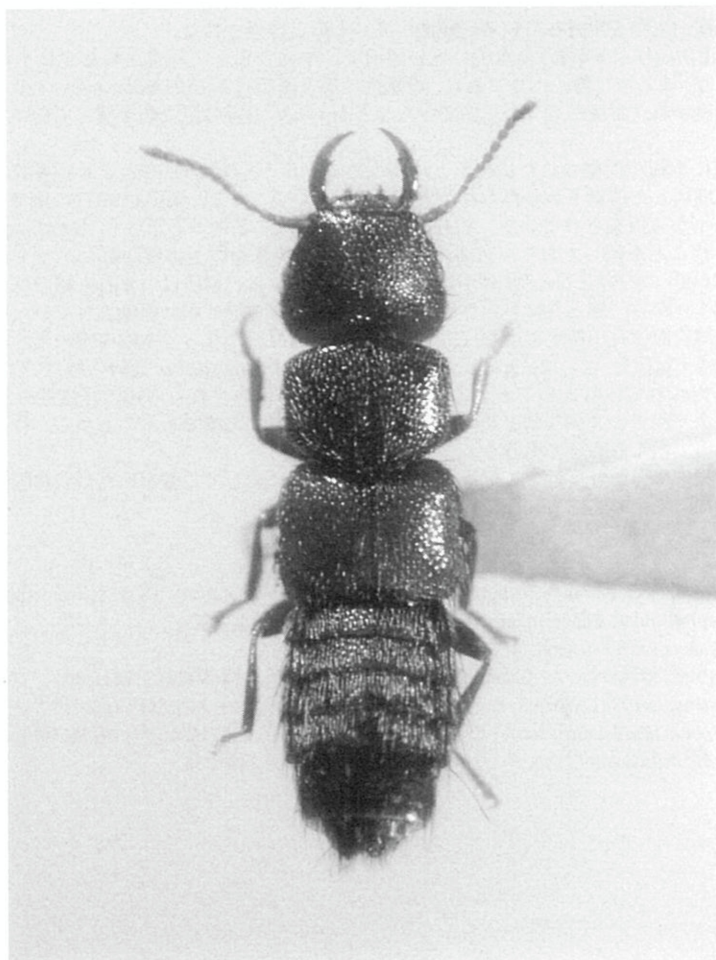


図1. *Astenus setifer* トゲトゲハネカクシ

嵐山町吉田地区では、水田の畔に置かれている石をそっと起こしたところ *Pristomyrmex pungens* アミメアリの巨大なコロニーが見られ、蟻のうごめく中にアリガタハネカクシの一種と思われる個体が腹部を強く曲げた状態で歩いているのを目撃した。この個体は巣内において蟻から攻撃を受ける様子は無く、たまたま蟻が触角でハネカクシの体を触れると、腹部をさらに強く曲げて歩いている様子が観察された。頭部などの特徴を見るうちに、この個体が本種であることに気が付き、それまでこの種が好蟻性のハネカクシであることは全く予想していなかったため、こうした一連の行動を見ながらも、石下にいたものが偶然蟻といっしょに得られたものなのか、真の好蟻性種なのか直ちには判断がつかなかった。何か好蟻性を証明するような確実性のある証拠が欲しいと、翌日に同じ場所で観察したところ、やはりコロニー内から同様の状態で採集されたため、ある程度確信を得た。この個体はフィルムケースに入れて生かしたまま蟻と共に持ちかえり、室内にて双方の行動を観察したところ、本種に蟻が接触する際には、必ず腹部を強く曲げる姿勢をとっていることが判った。

同町鎌形地区では、畑脇の石下に形成された *Tetramorium caespitum* トビロシワアリのコロニー内より採集された。この時も吉田地区での個体と同様に、腹部を強く曲げて歩行する様子が観察された。この日は 1 月にしてはたいへん気温も高く、石下の蟻の巣において好蟻性の甲虫が得られるには好条件であったと思われる。なお余談ではあるが、本種は標本となると腹部がやや縮むこともあり、とても *Astenus* の一種には見えないが、生時には腹部がとがっていて同属の他種と同じような雰囲気をもっているようにも見える。

川本町鹿島では、荒川の河川林から河原に移行する場所の石下に形成されたトビロシワアリのコロニー内に複数の個体が徘徊している様子が観察された。採集の際にコロニー内部に逃げられた個体についてはすぐに這い出てくる様子も無く、長時間巣内での行動が可能であることを伺わせた。最初に得られた個体のうち 1 頭は、摂食した生物の残骸と思われる肉片を口器にはさんでいたため、この状況から見る限り巣内で蟻そのものかあるいは他の好蟻性生物を摂食している可能性が高いものと推察された。

鳩山町石坂は越辺川(おっぺがわ)の水辺に近い場所で、やはり石下に形成されたトビロシワアリのコロニー内より得られた。ここでは驚くべきことに、好蟻性の種と思われる *Entomobrya* sp. アヤトビムシの一種を摂食中の個体が観察され、本種がコロニー内で少なくともトビムシ等の昆虫類を襲って食べていることが判明した。

今回の報告以前に本種が採集された状況を取りまとめてみると、柴田 (1995) では公園内の掃き寄せられた落葉下や側溝内に堆積した落葉下から得られた事を報告している。また、柴田 (1997) の例では、草原に放置されていた板切れの下から採集されている。新井 (1999) は河川敷の草地の石下より *Acanthoglossa* 属のハネカクシと共に採集したことを報じており、久保・渡 (1998) は炭焼き釜周辺に置かれたケヤキ丸太の下面から採集している (渡 (2000) の内容も同じ個体の再記録である)。これらの場所はいずれも蟻のコロニーが形成されやすい環境であることから、蟻と共に見出された個体を好蟻性と意識せずに採集されていた可能性が高い。

なお、国立科学博物館の丸山博士によれば、筆者以外の方も最近になって本種を蟻の巣から採集されているとのことで (丸山博士私信)、さらに、ASSING (2003) の報告では *Eurysunius* 亜属の種はいずれも非常に稀で、しかも蟻の巣から得られているとのことである。これらの内容はいずれも本種の好蟻性を裏付けるものである。トビロシワアリやアミメアリはどこにでもごく普通に生息する種であることから、今後注意して採集すれば追加記録が各地で増えることであろう。

末筆ながら、本報告にあたり文献等ご提供頂き、さらに本種に関してご教示いただいた国立科学博物館の丸山宗利博士ならびに町田市の柴田泰利氏に対し厚く御礼申し上げる。

参考文献

- ASSING, V., 2003. New species and records of *Eurysunius*, subgenus of *Astenus* DEJEAN, from the Iberian peninsula (Coleoptera: Staphylinidae, Paederinae). *Linzer boil. Beitr.*, 35/2: 693-700.
- 新井志保, 1999. *Astenus setifer* を東松山市で採集. 寄せ蛾記, (90): 2671.
- 久保浩一・渡 弘, 1998. 横浜にもいた *Astenus setifer* (ハネカクシ科). 神奈川虫報, (121): 32.
- 柴田泰利, 1995. *Astenus setifer* CAMERON という名のハネカクシ. 甲虫ニュース, (111): 1-3.
- 柴田泰利, 1997. *Astenus (Eurysunius) setifer* CAMERON (ハネカクシ科) を東京都町田市で採集. 甲虫ニュース, (120): 12.
- 渡 弘, 2000. 円海山地域の昆虫 (コウチュウ目). 神奈川虫報, (130): 115-286.

(埼玉県嵐山町)

○*Stenus aquilonalis* の埼玉県における採集例

関東と北海道、ならびにサハリンより得られた標本をもとに記載されたメダカハネカクシの一種 *Stenus aquilonalis* NAOMI et PUTHZ, 1997 は、原記載以後わずか1例の記録があるのみ(渡辺, 2001)で、直海博士のご教示によれば極めて稀な種とのことである。

幸いにも筆者は、埼玉県下において本種を採集していたので、得られた周囲の環境やこれまで知られる分布など、さらなる追加記録を期待する情報と共に記録しておく。

1♂, 30. XII. 1999, 埼玉県比企郡嵐山町鎌形(槻川沿い), 筆者採集(図1); 1♀, 14. XII. 2003, 同所,

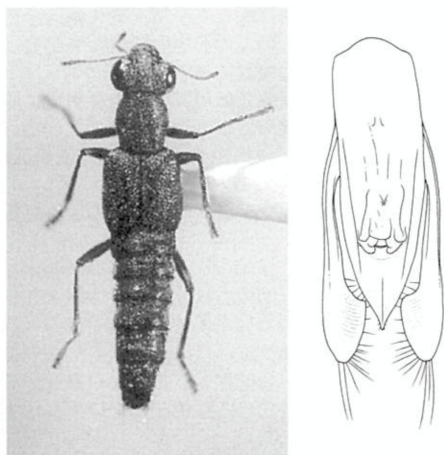


図1. 埼玉県産 *S. aquilonalis* 雄とその交尾器



図2. これまで知られる *S. aquilonalis* の記録地

新井志保採集, いずれも筆者保管。

採集地は秩父の低山地から関東平野へと移行する結晶片岩地帯の溪流である。流域には岩盤の大きく露出した景勝地が点在し、水際は急傾斜のためケヤキなどの樹木がいくらか生えている程度である。流路が大きくカーブする外側に大水等で堆積した落葉などが厚く積もり、岩盤の表面を覆い尽くしている、これらを丹念に除けてゆくことで本種は見出された。また同様の環境下から甲虫類では *Bembidion gebleri* アオマルガタミズギワゴミムシや *Claenius ocreatus* クロヒゲアオゴミムシ, *Stenus alienus* ホソフタホシメダカハネカクシが特に多く得られた。

この記録を含め、これまで報告された地点を示した(図2)。なお、黒丸は既知産地を、白丸は今回の記録地を示す。本州においては東北地方での記録がこれまで無いようであるが、先に示したような環境下で調査を実施することにより見出されよう。また関東以西での記録も期待したいところである。本種の得られた環境は決して特殊なものではないので、今後関東以北を中心に各地で得られるものと思われる。

末筆ながら、本種の情報に関してご教示頂いた千葉県立中央博物館の直海俊一郎博士、神奈川県藤沢市の渡辺 崇氏、ならびに調査協力頂いた妻の志保に対し、厚く御礼申し上げます。

参考文献

NAOMI, S., 1997. Four new species of the genus *Stenus* (Coleoptera, Staphylinidae), with Redescriptions of two interesting species from Japan. *Jpn. J. Ent.*, 65 (4): 745-759.
 渡辺 崇, 2001. 神奈川県新記録のハネカクシ5種. 神奈川県虫報, (135): 54-55.

(埼玉県嵐山町, 新井浩二)

○神奈川県津久井におけるホソリンゴカミキリ

南関東周辺地域におけるホソリンゴカミキリ *Oberea nigriventris* BATES はふつうブナ帯に生息し、イケマ類(ガガイモ科カモメヅル属)を後食することが知られている。しかし筆者は、本種を神奈川県津久井地方の低山山麓で生息を確認し、かつその地域の個体はヤマノイモ科植物を後食している可能性が考えられたので、同好の方々に注意を喚起する意味でここに不十分ながら観察例を報告しておく。

2頭採集, 数頭以上目撃, 神奈川県津久井町長竹(標高約200m), 22. VI. 2003; 6頭採集, 2頭目撃, 同地, 23. VI. 2004.

発見地は明るい疎林状態の斜面の林床であり、地上低くゆっくりと飛翔している姿を見ることが多かった。本種は、神奈川県では丹沢山地と箱根火山で記録されているが、津久井町での記録は最近の有井・守屋(2004, 津久井町史編集委員会編, 津久井町の昆虫 I, 113 pp. など)に掲載されていないので、



図1. オニドコロ(ヤマノイモ科)に静止するホソリソウガミキリ

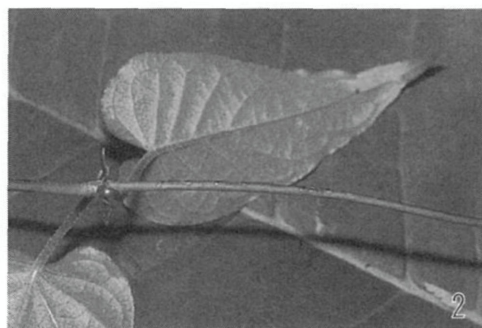


図2. オニドコロ(ヤマノイモ科)に見られた後食痕

北～東丹沢方面からはこれまで未発見だったと思われる。

2003年の際の観察では、斜面の一角で比較的多くの個体に遭遇した。いくつかの個体はヤマノイモ類(ヤマノイモ科)に興味を示し、それにまわりつくように飛んだり、あるいは葉または蔓に静止する(葉上に止まったものはすぐに葉裏へと移動する)習性を示した(図1)。このため、静止した個体についてヤマノイモ類を後食するかどうか確認を試みたが、すべて数秒ないし数10秒～1-2分のうちに葉裏を離れてしまい、確実に後食したと断定できる観察には至らなかった。ただし、ヤマノイモ類の蔓からは本種のもののような後食痕がいくつも見出された。なお、イケマ類も注意して探したつもりだったが、1株も発見できなかった。

はたして本種がヤマノイモ類を後食するかどうか気がなり、2004年も同地を訪れた。このときは、姿を確認できた場所は幅せいぜい5mほどのごく狭い地点に限られたので、その場所を中心にして後食対象植物の探索を試みた。しかし、観察中にどうしても林床植物を揺らしてしまうせいか、どこからか低く飛び出しては近くの低木あるいは草本の葉裏に静止する個体が目に付くだけで、実際に後食中の個体を発見するには至らなかった。また、その周辺も含めてイケマ類は見当たらず、ガガイモ科植物はわずかにオオカモメズル1株を確認できたにすぎ

なかった(本種のものと思われる後食痕は見出せなかった)。一方、蔓植物としては他にオニドコロ(ヤマノイモ科)が優占して生育し、アオツツラフジ(ツツラフジ科)とヘクソカズラ(アカネ科)も見られた。これらを調べた限りでは、蔓部分に明瞭に後食痕が残されていたのはオニドコロだけであり(図2)、またこうした後食痕は少ないものでなかった。

以上の2回の観察例からは、私たちの常識で考えるならホソリソウガミキリがイケマ類以外を後食することは信じがたい(ナシという戦前の記録が残されているが)にせよ、ヤマノイモ科植物もその対象としている可能性を捨て去るわけにはいかないように思える。どなたか今後、この可能性の有無を調べていただけたらありがたい。

なお、当地の個体は総じて小型、黒化傾向が認められた。他産地のものとの形態面の比較も必要と考えられたので、別途検討依頼中である。

上に記した植物の種名は当館の勝山輝男氏に同定していただいた。改めてここに感謝申し上げる。

(神奈川県立生命の星・地球博物館、高桑正敏)

○北海道におけるシマケシゲンゴロウの採集記録(中間報告)

シマケシゲンゴロウ *Coelambus chinensis* (SHARP) の分布域は国内では北海道・本州・九州であり、国外では中国に分布するとされている(森・北山, 2002)。本種は記録自体が少なく、国内の分布状況についても十分把握されていない模様であるが、筆者の北海道における採集記録を以下に示すこととする。

1. 1ex. 北海道中川郡池田町利別(灯火). 25. VII. 1995.
2. 1ex. 同東郡音東町然別. 29. IX. 1995.
3. 1ex. 同東郡音東町駒場. VII. 30. 1996.
4. 1ex. 同札幌市福移(国土地理院標準地域メッシュ No. 6441-53-73). 8. VIII. 2001.
5. 1ex. 同常呂郡常呂町鉄山(6543-77-97). 14. VIII. 2001.
6. 1ex. 同伊達市南黄金(6340-47-73). 23. IX. 2001.
7. 1ex. 同寿都郡黒松内町豊幌(6340-72-69). 24. VIII. 2003 (写真).

文献記録では、札幌市(松井, 1997)、石狩市(石狩川開発建設部, 1994. 建設維持管理センター, 1998)、苫小牧市(吉田・岡崎・堀・村井, 1995)、標茶町(松井, 1997)、美幌町(上手, 2001)、網走市(上手, 2002)、江別市(堀, 2002)から記録されており、これまでの記録から判断すると、本種は汎全道的に分布している傾向があるものの、それと反比例して稀な種類であるようで、筆者のこれまでの採集例もそのことごとくが1頭単位で、一カ所で複数の個体が得られたことは未だになく、佐藤(1997)の報告にあるような、多数の個体が一カ所でまとまって採れるというのは甚だ稀なケースである



らしい。

なお、筆者の以前の報告(1998)にあった中川郡豊頃町の記録2例(1. VIII. 1996. 25. VIII. 1996)はカラフトシマシゲンゴロウ *C. impressopunctatus hiurai* M. SATO の誤同定であったので、ここに訂正する。

参考文献

- 堀 繁久, 2002. 野幌森林公園のゲンゴロウ相. 北海道開拓記念館研究紀要, (30): 1-12.
- 北海道開発局・石狩川開発建設部, 1994. 平成5年度施行石狩川改修工事の内 石狩川水系環境調査業務 生振地区水辺調査環境調査報告書. III: 22-28. 北海道開発局, 石狩川開発建設部, 株式会社建設維持管理センター.
- 株式会社建設維持管理センター, 1997. 平成8年度 石狩川水系河川水辺の国勢調査業務(生振地区水辺環境調査)報告書: pp. 49-51. 水動 pp. 1-6.
- 株式会社建設維持管理センター, 1998. 平成9年度 石狩川水系河川水辺の国勢調査業務(生振地区水辺環境調査)報告書(1998): pp. 61-65. 水生動物調査 pp. 5-16. 株式会社建設維持管理センター.
- 上手雄貴, 2001. 北海道美幌町から記録されたゲンゴロウ類. 美幌博物館研究報告, (8): 67-74.
- 上手雄貴, 2002. 北海道網走管内のゲンゴロウ類. *jezoensis* (28): 48-60.
- 松井英司, 1997. 北海道で採集した水生甲虫類. 北九州の昆虫, 44(1): 25-32.
- 松本英明, 1993. 北海道のゲンゴロウ採集. 昆虫と自然, 28(8): 8-13.
- 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説・日本のゲンゴロウ. pp. 76-77. 文一総合出版.
- 佐藤光一, 1997. 渡良瀬遊水池の動植物実態調査報告書(昆虫編): 52-55. (渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会)
- 山川雄大, 1998. 北海道十勝管内におけるシマケシゲンゴロウの記録. 月刊むし, (326): 39-40.
- 山川雄大, 2000. 北海道池田町から記録されたゲンゴロウ類. *Sylvicola*, (18): 19-26.
- 吉田国吉・岡崎克則・堀 繁久・村井雅之, 1995. 苫小牧および厚真地方のゲンゴロウ類. 苫小牧市博物館研究報告, (5): 1-8.

(北海道室蘭市, 山川雄大)

○東京都世田谷区におけるタマムシ類数種の記録

東京都世田谷区におけるタマムシ類の記録としては、世田谷区(1988)によりヤマトタマムシ, ウバタマムシ, ロニノナガタマムシ, クズノチビタマムシ, ヤノナミガタチビタマムシの5種(採集データはない)があげられ、黒沢(1975)により二子玉川におけるクロケシタマムシの記録が示されている。また、秋山・大桃(2000)によるとコウゾチビタマムシの基産地として世田谷区砧があげられている。なお、秋山(1987)でクロエグリタマムシの名が示されているが、これは黒沢(1975)に採集データを付け再録したものであり、学名はクロケシタマムシのものであることから、和名の書き間違いと思われる。

筆者はこれらの資料に記録のないタマムシ類を世田谷区内で採集しているので記録する。なお、採集者はすべて筆者である。

1. ムツボシタマムシ *Chrysobothris succedanea* E. SAUNDERS
6 exs., 砧公園, 3-6. V. 2000 (広葉樹枯枝より羽化); 4 exs., 砧公園, 20-21. IV. 2002 (広葉樹枯枝より羽化).
2. ムネアカチビナカボソタマムシ *Nalanda rutilicollis* (OBENBERGER)
1 ex., 大蔵, 4. VII. 2004; 1 ex., 大蔵, 25. VII. 2004.
アカメガシワのスウィーピングにより採集した。
3. ケヤキナガタマムシ *Agrilus spinipennis* LEWIS
多数, 岡本, 30. V. 2004, ケヤキ衰弱木に多数飛来。
4. ムネアカナガタマムシ *Agrilus imitans* LEWIS
1 ex., 砧公園, 12. V. 2001 (ケヤキ枯枝より羽化); 3 exs., 大蔵, 3. IV. 2004 (ケヤキ枯枝より羽化); 多数, 大蔵, 30. V.-9. VII. 2004 (エノキ伐採枝に多数飛来しているのを確認した)。
5. シラホシナガタマムシ *Agrilus alazon* LEWIS
6 exs., 大蔵, 30. V. 2004; 8 exs., 大蔵, 3-19. VII. 2004.
ムネアカナガタマムシと同じエノキ伐採木に飛来しているのを確認。
6. シロテナガタマムシ *Agrilus sospes* LEWIS
2 exs., 大蔵, 14. V. 2000; 6 exs., 砧公園, 16. III.-5. IV. 2002 (ケヤキ枯枝より羽化)。
7. ヒシモンナガタマムシ *Agrilus discalis* E. SAUNDERS
2 exs., 大蔵, 10. VI. 2001; 1 ex., 砧公園, 18. IV. 2004; 多数, 大蔵, 8. V.-18. VII. 2004 (エノキの葉上や伐採枝で確認)。
8. ヒメアサギナガタマムシ *Agrilus hattorii* NAKANE
1 ex., 大蔵, 8. V. 2004, 草上で確認。近くにコナラ等の林があり、そこで発生しているものと思われる。

なお、ヤマトタマシ *Chrysochroa fulgidissima* (SCHÖNHERR) はすでに区内での生息は知られているが、具体的なデータが見られないので参考として以下に記録する。

3 exs., 大蔵, 19. VII. 2004 (他にエノキ大木の梢を複数の個体が飛翔しているのを確認); 4 exs., 大蔵, 25. VII. 2004 (エノキ伐採枝に飛来している個体を確認)。

参考文献

- 秋山黄洋, 1987. タマシ科3種の記録, 甲虫ニュース, (79/80): 6.
 秋山黄洋・大桃定洋, 2000. 世界のタマシ大図鑑, p. 284. むし社.
 黒沢良彦, 1975. 日本産タマシ科概説(15). 甲虫ニュース, (31/32): 3.
 世田谷区, 1988. 世田谷自然観察シリーズII. セタがや動物ガイド, p. 162. 世田谷区.
 (東京都世田谷区, 山崎裕志)

○蘭嶼島で採集された台湾ナガクシヒゲムシについて

筆者は今年、台湾の蘭嶼島を訪ねた際、台湾ナガクシヒゲムシ *Callirhipis formosana* Pic, 1912 と思われる個体 (Fig. 1) を FIT により採集することができたので、ここに記録しておきたい。

1♂, 台湾省台東県蘭嶼島横貫公路(紅頭~野銀), 22-23. VIII. 2004, 筆者採集・保管。

SATŌ (1995) は、琉球列島および台湾に生息するナガクシヒゲムシを再検討し3種を認めている。外形はどの種もよく似た形状をしているが、頭部触角間の幅や雄交尾器側片先端の構造に違いが認められ

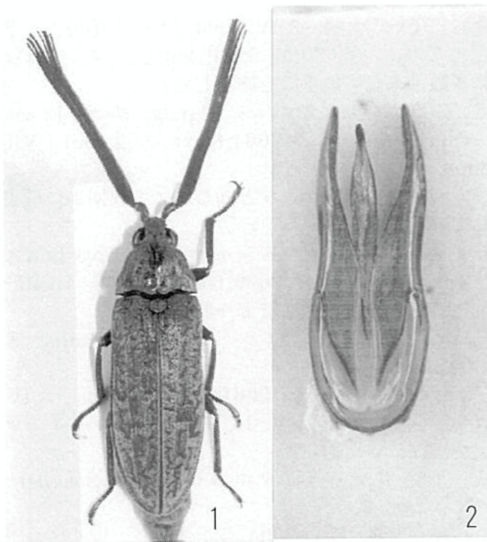


Fig. 1. タイワンナガクシヒゲムシ.
 Fig. 2. Male genitalia, ventral view.

という。今回採集された個体は、頭部触角間の幅が狭いこと、雄交尾器側片先端が単純で、鈎状突起を持たない特徴が台湾ナガクシヒゲムシの特徴に一致したので本種と同定された。ただ、SATŌ (1995) が図示した雄交尾器の形状と比較すると、今回蘭嶼島で採集された個体の側片はやや細いようなので、ここに参考として図示しておく (Fig. 2)。

引用文献

- SATŌ, M., 1995. Notes on the genus *Callirhipis* (Coleoptera, Callirhipidae) from the Ryukyu Islands and Taiwan. *Elytra, Tokyo*, 23: 17-23.
 (東京都世田谷区, 鈴木 互)

◇甲虫ニュース原稿送付・問い合わせ先◇

原稿をワープロ等で作成される場合は、刷り上がり2頁を超える報文は1行49字、短報は1行23字にそろえ、FDとプリントアウトした原稿を1部つけて下記宛へお送りください。付図がない場合には電子メールの添付ファイル(一太郎ワード)でお送りください。

〒156-0053 東京都世田谷区桜3-14-13

鈴木 互

E-mail: elater@b08.itscom.net

甲虫ニュース 第147号

発行日 2004年9月30日

次号は2004年12月中旬発行予定

発行者 高桑正敏

編集者 鈴木 互(編集長), 長谷川道明, 川島逸郎, 奥島雄一, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館昆虫第2研究室 電話 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 2004年度 6,000円(一般会員)

※2005年度より7,000円

郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社